

呉錦堂を語る会通信

NO.30 Nov. 2016

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員
発行日 2016年11月1日



武藤山治(1867～1934)と呉錦堂(1855～1926) 1. 舞子浜の住人

現在、県立舞子公園内に、旧武藤山治邸と移情閣（孫文記念館）が、約百メートルの距離をおいて復元されておりますが、神戸開港150年を迎える今、両建築物の所有者、武藤山治と呉錦堂について語ることは、意義のあることと考えます。

なお、本第30号掲載の武藤山治に関する記事、並びに画像については、令孫、武藤治太氏の了解をいただきました。

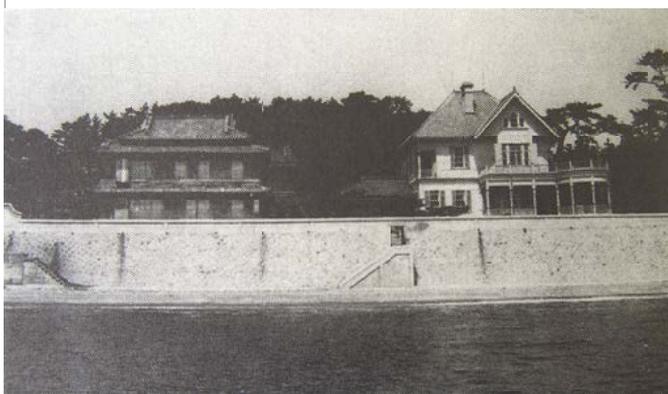
右の写真（編集委員撮影）は現在の舞子浜です。右寄りが旧武藤山治邸、左寄りが移情閣（孫文記念館）です。（編集委員 橋 雄三）



《1. 武藤山治邸、洋館移築と和館取り壊し》

まず、武藤邸についてみてゆきます。武藤治太氏は、その著『武藤山治をめぐる群像』（公益社団法人国民會館 2012年）で、舞子浜の武藤邸について、次のように記述されています。

「昨年（平成二十二年）の十一月七日神戸の舞子公園に、ある紡績人の旧宅が移築復元されました。[図1]の写真（省略）にある通りの洋館でございます。これは、武藤山治の旧宅でございます。旧鐘紡舞子倶楽部という名称でも知られていた建物でございます。この建物は、明治四十年に旧国会議事堂の設計者であります大熊喜邦さんという方が設計されたものです。この建物は昭和六十年代まで、現在の舞子公園から東の位置に[図2]（下の写真）のかたちで建っておりました。右側が今回移築されました洋館で、左側が和館でございます。（中略）（明石海峡大橋の建設工事に関連し）狩口台に移転したのは洋館のみでございます。和館はそのときに取り壊されてしまったのですが、その和館のほうにも非常に大きな価値があったのです。和館を取り壊



していた最中に、その天井裏から竹中藤右衛門これをつくるといふ御幣が出てまいりました。竹中工務店の初代の社長でございます...」

《2. 武藤山治邸の建築年月》

武藤山治の舞子ヶ浜での土地取得については、『通信』第24号で述べましたが、その中心となった2028番ノ11は、明治38年6月27日の取得です。上掲『武藤山治をめぐる群像』の記述によりますと、「明治四十年に旧国会議事堂の設計者であります大熊喜邦さんという方が設計されたものです」とありますが、竣工年月がはっきりしません。それに、これは、洋館についての記述で、和館についてはどうなのかも気になります。

こんな疑問から、上述「御幣」に、移情閣の幣串のように、上棟式年月日などの記述があるのではと、武藤治太氏に問い合わせたところ、「御幣は竹中工務店に預けておりますので、詳細については、竹中工務店に聞いてください」とのお返事でした。

以下、株式会社竹中工務店から頂いた返事です。

「社内調査しましたが、残念ながら武藤邸の御幣（棟札）は見つかりませんでした。ご期待に添えず申し訳ありません。引き続き調査を続けます。

社内資料によりますと、武藤山治邸の工期は1906年（明治39年）3月より1907年（明治40年）6月となっております。木造2階建てで、設計は横河建築設計事務所の大熊喜邦です。

この工期は、洋館・和館どちらのものなのか、あるいは両方が不明ですが、恐らくは同時期に施工していたものではないかと推察いたします。」

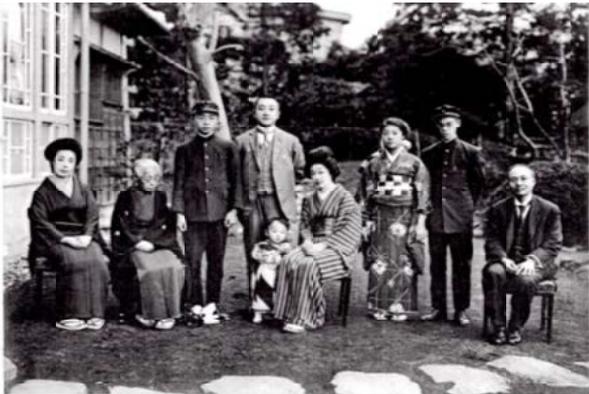
1. 舞子浜の住人（続き）

《3. 舞子・武藤家の生活》

次に、『旧武藤邸だより』第9号（2014年夏号）、公益社団法人国民會館理事松田尚士氏執筆「武藤山治の5人子ども達 - 舞子・武藤家の生活 - 」の一部を、画像を含め、引用いたします。

「明治40年（1907）、舞子の海岸に、大熊喜邦設計の和館と洋館、厨房棟、ビリヤード棟が連なった武藤邸が完成した。武藤夫妻は神戸市中山手より5人の子と、千世子の母の光と共に引っ越してきた。当時、山治は40歳、千世子は30歳、長女蝶子は11歳、長男金太は9歳、次女二三子は6歳、次男絲治は4歳、三女勝子は2歳だった。

舞子に移り住んだ理由は、子ども達の健康と成長のためだった。（中略）山治は和田岬の職場から遠くなることも厭わず、子どものために舞子という環境の良い地に居を構えたのだった。」



左から千世子、光、絲治、中上川三郎治（蝶子の夫）
静子（蝶子の娘）、蝶子、勝子、金太、山治

《4. 舞子地域における呉錦堂の居宅並びに別荘》

舞子地域における呉錦堂の住居というと、舞子浜の松海別荘と上ノ山の呉邸をあげることができます。両者については、『通信』第24号、および第28号でとりあげましたので、ここでは、略述します。

1. 松海別荘 明治38年7月土地取得。
付属棟 明治20年代後半から存在した？
本館 明治44年竣工

『通信』第7号、講演「新移情閣秘話」で、塚原淳氏（現・兵庫県公園緑地課長）は、「明治44年竣工」の根拠を話されています。
移情閣 大正4年5月12日上棟

2. 上ノ山・呉邸 明治39年9月土地取得。

洋館と和風建築があった。建築年不詳。

上記1と2を行き来するのが呉家の生活だったと思われま。別に籠池通にも邸宅がありました。

右は、1922、23年頃、移情閣前で撮った写真です。長男啓藩と5人の孫たちです。呉錦堂の表情に、余裕と落ち着きがうかがえます。

上ノ山・呉邸は山陽電車の舞子公園駅の北東すぐにありましたから、孫たちを連れ、簡単に別荘を往復できたのです。



呉伯瑄氏所蔵

《5. 呉家と武藤家の交流》

神戸新聞社『海鳴りやまず - 神戸近代史の主役たち - 第2部』「相場師、呉錦堂」（神戸新聞出版センター 1978年）から、武藤家と呉家の交流の具体例を一つ紹介いたします。

「大正のはじめ、あたりに数件の民家が点在する寂しい浜辺だった。移情閣の東側に八木商店の八木与三郎の別荘、その隣に武藤山治の家。50^m間隔の三家は家族ぐるみの付き合いで、親しく往来していた。やがて武藤家の二女・二三子は幼馴染の八木家の長男幸吉に嫁ぐ。二三子に、呉錦堂にまつわる思ひ出話を聞いた」

八木二三子氏の回想。

（呉錦堂について）「日本語はちょっとアクセントがあるけれど、達者でしたよ。商売に抜け目のない、華商そのものの印象でした」

（夫人について）「夫人は上品なおとなしい方で、テン足でよちよち歩かれたのを覚えています」

（長男・啓藩について）「私が小学校へ行く前のことで、その子をケイバン、ケイバンと呼んで仲良くしていました」

『通信』編集委員補注：啓藩は1894年、二三子は1901年生まれ。



昭和5年の舞子浜（武藤治太氏所蔵）

2. 中山手にあった武藤邸と呉邸

これまで、呉錦堂の邸宅について、舞子地域の舞子浜の別荘と上ノ山の邸宅、神戸中部の籠池通の邸宅、計3カ所についてみてきました。ところで、もう一カ所、中山手（あるいは中山手通）にも邸宅があったと思われます。ただ、これに関する情報は断片的なものしかなく、「幻の中山手・呉邸」として、現在に至っております。武藤邸との関係ほかを手掛かりに、中山手にあったと思われる呉邸に迫りたいと考えます。（編集委員 橋雄三）

《情報1. 武藤山治著『私の身の上話』より(1)》

武藤山治著『私の身の上話』（武藤金太 1934年）に「三井の鐘紡株賣却」という回想があります。「或日東京の朝吹氏から突然兵庫の事務所に電話がかかってまゐりまして、私に、愈々三井は鐘紡の株を賣却することに定まった。君は定めし立腹するだろうが今日は最早どうすることも出来ないから、君から呉錦堂に買収の交渉をするようにせられよとのことであります。（中略）事茲に至っては他人の手に渡すよりは呉錦堂に買われる方が将来仕事の邪魔にならぬから最上策と考へ、呉錦堂に電話すると彼は早速飛んで参り...」

武藤家と呉家は電話を受けて飛んで行ける距離にあったのです。回想録文章中、「当時は日露戦争が終わり、其頃から株の値が暴騰し始める時に当たったから...」とありますから、1905年のことです。

《情報2. 武藤山治著『私の身の上話』より(2)》

『私の身の上話』からもう一つ、「人の世話」という随想を取り上げます。これは、呉錦堂に紳士教育を与えようと、呉の長男啓藩の家庭教師という名目で適任者を紹介し、住み込ませ、結果的には失敗した話です。

ところで、これは、呉邸がどこにあった時代の話なのか、作品を読む限りでは、はっきりとはわかりません。ただ、文中、時期を特定するヒントはいくつかあります。「呉錦堂は、鐘紡の大株主となって取締役に選挙され、財界知名の一人となりましたが、...」「然るに呉錦堂の息子の啓藩といふのは早くより母親に別かれ繼母に育てられて居りましたから、短い間でも親身に世話して呉れた家庭教師を慕ひ、家庭教師の方でも啓藩を可愛がり双方共別れ様ともしなかつた様でした」といった記述です。

ですが、呉錦堂が鐘紡の取締役をしていたのは、1905年7月17日から1907年1月12日迄です。したがって、この期間とそう違わない時期と言えます。

について、呉錦堂の長男啓藩は1894年の生まれです。家庭教師になつくといふのですから、10歳、つまり、1905年頃と思われる。

から1905、6年の出来事と推察いたします。

舞子地域に呉錦堂の邸宅及び別荘が完成していくのは、情報1、及び2の時期より数年あとです。結論として、この時期の呉邸は中山手にあった武藤邸の近くと考えます。

《情報3. 中村哲夫著『移情閣遺聞』より》

中村哲夫著『移情閣遺聞』（阿吽社 1990年）に次の記述があります。

「1900年、神戸に華僑の学校である同文学校が発足している。（中略）その契機は、1899年5月に、梁啓超を神戸に講演に招き、その熱心な提唱により教育活動が開始されたことによる。（中略）このとき、呉錦堂が梁啓超を自宅（現、神戸市中央区中山手）に招待し、その庭で梁啓超を取り囲み多くの華僑と共に写した記念写真が移情閣に展示されている」

編集委員補記：上掲著書に画像はありません。該当すると思える写真を下に掲載いたしました。



神戸華僑歴史博物館所蔵

《情報4. この時期、武藤邸はどこにあったのか?》

かつて、情報1の「呉錦堂に電話すると彼は早速飛んで参り...」の時期、武藤邸はどこにあったのですかと武藤治太氏に問い合わせ、「諏訪山の近くにありました」とのお返事をいただいたことがあります。筒井芳太郎著『武藤山治傳、武藤絲治傳』の略年譜では、この時期の武藤邸は中山手通6丁目57になっております。ここは、いまの神戸中華同文学学校のあたりです。矛盾しません。

呉錦堂邸もこの辺りにあったのでしょうか。更に数件、情報を補います。

（次ページ下へ続く）

3 . 武藤山治と呉錦堂の出会い、それから

「呉錦堂はどのようにして武藤山治と出会ったのか」、私はそのことがずっと気になっていました。これに関し、興味深い一文を見つけました。『公民講座 - 武藤山治氏追悼号 - 』（社団法人国民會館 1934年）の記述です。下に転載いたします。それからもう一つ、鐘紡の取締役時、「支那服の重役」と言われた呉錦堂ですが、『私の身の上話』掲載の写真を取り上げました。また、鐘紡取締役時の呉錦堂といえば「鈴久事件」が知られていますが、これについては、『通信』第29号を参照ください。（編集委員 橘雄三）

《1 . 公民講座 - 武藤山治氏追悼号 - 》

武藤山治は、昭和9年3月9日、北鎌倉で凶弾にたおれます。翌10日死去。同年4月17日、鐘紡兵庫工場創業当時の武藤山治を語る座談会が住吉の武藤邸で開かれました。この座談会は、当時、兵庫工場で武藤山治の手足となり悪戦苦闘した人々のほか、千世子未亡人、息金太、絲治、八木与三郎、八木幸吉の諸氏が加わっています。この座談会の記録を掲載したのが上掲追悼号です。該当箇所を引用します。

「呉錦堂氏（中国の豪商）が棉を売りこみに来たとき、たれかひどく叱られていた。その見幕に驚いて、『きょうは天気が悪うございます』と帰って行ったことが、何回もあったらしい。しかし、武藤さんはその人にいわれるのでなく、その仕事にたいしていわれるのですから、みな感銘に打たれるわけで、会社の使用人が武藤さんは血も涙もある方だというのは、そこにあるのです。」

発言者は武藤山治の人柄について語っていますが、『通信』編集委員としては、発言中の呉錦堂についての記述の方がずっと貴重です。この記述から、呉錦堂が中国棉の売り込みのため、創業間もない鐘紡の兵庫工場に、支配人の武藤山治を頻りに訪ねていたことがわかります。当時、武藤山治は30歳前後、呉錦堂は42、3歳と思われます。

《2 . 一枚の写真 - 武藤山治、八木與三郎と呉錦堂》

武藤山治と呉錦堂と一緒に写っている写真は他に

あるのでしょうか。寡聞にして、これ以外は知りません。『私の身の上話』には、「左より 八木與三郎氏 呉錦堂氏 著者 明治43年 鐘紡の大株主であった呉錦堂氏・大阪の綿糸商八木與三郎氏・著者」とコメントされ、鐘紡株式会社史編纂室『鐘紡



百年史』（鐘紡株式会社 1888年）では、同じ写真に対し、「右から 武藤専務 呉錦堂 八木与三郎（明治42年頃）」と注釈が付いています。ちなみに、呉錦堂が取締役であったのは、『鐘紡百年史』によると、明治38年7月17日から明治40年1月12日迄で、写真の日付は、この期間より後になります。

前ページから続く

《情報5 . 『近世名勝負物語』並びにその他情報》

（1）村松梢風『近世名勝負物語』「黄金街の覇者」（1953年 読売新聞連載）では、三井の鐘紡株売却の件を次のように描いています。

「武藤は神戸へ着くとすぐ、自宅へ帰ったが、会社へも顔を出さずに、隣家の呉錦堂を訪問した。（中略）山手に建てた純支那風の建築...」

（2）『図解神戸清商外商営業須知』（神戸日華新報社 明治43年）の「怡生号」の欄に、「主人 呉錦堂 資産家 中山手通3丁目」とあります。番地

がないのは残念ですが、呉錦堂が大阪から神戸に出てきて最初の住所、「中山手」につながるヒントになるような気がします。

（3）大正15年1月16日付神戸新聞の呉錦堂死亡記事、主治医として、「北長狭佐野病院佐野馨氏」の名が出ております。佐野馨氏は、年齢は呉錦堂より1歳下で、呉錦堂が神戸へ出てくる2年前（1888年）に、北長狭通4丁目に佐野病院を創設しています。おそらく、呉錦堂の中山手時代からの掛かりつけ医だったと思われます。

（4）呉伯瑄（ご・はくせん）氏は、「祖父が大阪から神戸へ出てきて、最初に住んだのは中山手だったと聞いております」とおっしゃいます。